

## 知的障害養護学校に在籍する運動障害を有する児童への支援

－知的障害養護学校と肢体不自由養護学校の連携－

松原 豊\*・中村 晋\*\*・浅川 達之\*\*・安達 敬子\*\*  
 竹村 洋子\*\*・安部 博志\*\*・北村 博幸\*\*\*・安川 直史\*\*

特別支援教育を推進するための課題の一つである重度・重複障害児の対応について、関係諸機関との密接な連携が重要であるが、連携は福祉・医療・労働などの関係諸機関のみならず、盲・聾・養護学校間の連携も重要な役割を果たすと思われる。本論では、知的障害養護学校で学習する運動障害を有する重複障害児童に対し、肢体不自由養護学校と連携した教育実践を行い、そこで必要とされた肢体不自由教育の専門性は何であり、どのような支援が有効であったかについて検討した。その結果、重度・重複障害児に対する個別の指導計画作成のノウハウや自立活動の指導方法、教材教具、福祉機器の情報が必要とされ、肢体不自由養護学校の教員が対象児童への直接指導も交えながら、定期的に支援していったことが有効であったことが示された。

キー・ワード：重度・重複障害 学校間連携 自立活動

## 1. 目的

「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」（平成17年12月8日中央教育審議会）において、「これまで小・中学部における訪問教育（通学して教育を受けることが困難な児童生徒に対し、教員が家庭、児童福祉施設、医療機関等を訪問して行う教育）の対象となっていた障害の重い児童生徒の盲・聾・養護学校への受入れが進むとともに、盲・聾・養護学校（小・中学部）においては、現在、約43.3パーセント（肢体不自由養護学校においては約75.3パーセント）の児童生徒が重複障害学級に在籍している。こうした障害の重度・重複化に伴い、盲・聾・養護学校においては、福祉・医療・労働などの関係機関等と密接に連携した適切な対応が求められている。」と、盲・聾・養護学校の重度・重複化の現状と、関係諸機関が連携して、この課題に取り組むことが提案されている。関係機関の連携は、盲・聾・養護学校と福祉・医療・労働の機関との間で行われる場合が多いが、盲・聾・養護学校間の連携も重要であると考えられる。多様な障害を併せ持つ重複障害児童生徒の教育には、それぞれの学校が有している専門性だけではなく、盲・聾・養護学校がこれまで培ってきた、様々な専門性をお互いに提供し合い、共有し、発展させていくことが求められていくと考えられる。そこで、今回の報告では、知的障害養護学校で学習する重度の運動障害と知的障害を有する脳性まひ児に対して、肢体不自由養護学校との連携による支援教育の実践について報告する。

## 2. 方法

## 1) 対象児童について

- ①対象児童：Aくん、男子、小学部3年生（平成18年4月現在）
- ②障害の状態：脳性まひ（四肢体幹機能障害）、知的障害
- ③遠城寺式乳幼児分析発達検査（平成16年4月実施）：  
 運動（移動運動0：5～0：6，手の運動0：7～0：8）  
 社会性（基本的習慣0：6～0：7，対人関係0：7～0：8）  
 言語（発語0：5～0：6，言語理解0：9～0：10）
- ④実態：移動はバギーを使用，学習，食事は座位保持椅子とカットテーブルを使用している。体重を全面的に支持すれば，立位姿勢になり短時間腰と膝を伸ばしていることができる。食形態は普通食で，摂食は普通のスプーンを使用している。パンなどは手づかみで食べることができる。スプーンを自分の口に運ぶことも可能だが確実性が低く，時間がかかってしまう。水分補給はストローを使用している。排泄はおむつで行っている。コミュニケーションは言葉による表出は難しいが，具体物があると要求するものの方に手を伸ばそうとする。否定する時は，嫌な表情をしたり，自分や他の人の手を噛むことがある。嫌なときには，大きな声を出すことがある。好きな物はデカレンジャー，ディズニーのキャラクター，好きな活動は，絵本の読み聞かせ，タオルブランコ，トラランポリンなどの揺らし遊び，童謡・アニメソングなどの音楽であり，苦手な物は暗い場所や黒い熊，アフロヘアーなどの黒い物である。

\*筑波大学特別支援教育研究センター    \*\*筑波大学附属大塚養護学校    \*\*\*名寄市立大学

## 2) 支援方法

### ①支援の経由

平成16年3月に対象児童が大塚養護学校で学習を開始するにあたり、大塚養護学校支援部から、桐が丘養護学校支援部に肢体不自由教育面における支援要請があった。そこで、桐が丘養護学校は定期的に以下のような項目に関して相談・指導・助言を実施してきている。なお、相談・指導・助言は、対象児を担当する大塚養護学校の教員だけではなく、介助員、保護者に対しても必要に応じて随時実施した。

### ②支援の内容

- ・ 脳性まひ児の特性や肢体不自由養護学校の教育の実際に関する情報の提供
- ・ 個別的教育計画，サポートブック作成の助言
- ・ 肢体不自由児の自立活動の具体的な方法に関する助言，指導
- ・ 車椅子操作，移乗，トイレ，摂食等の介助方法に関する指導，助言
- ・ 肢体不自由教育の教材教具や福祉機器に関する情報提供

### ③支援の方法

- ・ 脳性まひ児の特性および肢体不自由養護学校の教育の実際に関する情報については，附属桐が丘養護学校の教育課程，紀要に掲載された実践研究，文献類などを紹介した。
- ・ 個別的教育計画，サポートブック作成に関しては，対象児の自立活動の課題とそれに対する支援方法，手立てに関するレポート（表1）を作成し，参考意見として提案した。
- ・ 自立活動に関する具体的な方法の助言，指導および車椅子操作，車椅子から椅子，トイレなどへの移乗，摂食など介助方法，排尿の指導，運動の指導，行事への参加方法などに関しては，巡回相談・指導の時間に担当教員，介助員と共に実践を通して指導を行うようにした。
- ・ 教材教具，福祉機器の情報に関しては，教材教具の貸し出し，福祉機器展案内，福祉機器カタログの提供，学校における福祉機器の使用方法に関する医療関係者に対するレポート作成などを行った。

### ④支援に対する評価

桐が丘養護学校からの支援について，どのような内容が有効であったかを評価するために，対象児童の担当者，支援部教員，小学部主事に対してアンケートを実施した。

## 3. 結果

### 1) 支援の経過

自立活動の視点から対象児童の実態を把握し，表1に示したような課題および支援の方法・手立てを提案した。また，指導上の留意点として以下のような意見を添えた。

「自立活動の指導は「時間の指導」として，個別指導を行うプログラムと「関する指導」としてクラスの活動の中で展開されるプログラムを用意してほしい。個別プログラムは毎日登校後，「着替え・個別指導」の時間に「健康の保持」「身体の動き」に関する活動を行うようにしたい。また，1週間に1時間取り出しの個別指導として，あそび，感覚-運動，上肢操作の力を育てることをねらった活動を行いたい。クラスの中で展開するプログラムでは排尿の自立やコミュニケーション，ペーサー・ゲートトレーナーを活用した移動，スイッチ遊び，造形などの活動を行いたい。補助機器，補助手段は，学習活動の中で必要性に応じて適切に用いるように工夫したい。例えば，毛布ブランコで遊ぶという目的で教室からプレイルームに行くためにゲートトレーナーを用いたり，造形やスイッチ遊びで手が動かし易い座位保持椅子や，カットテーブルを使用したり，好きな食べ物を選択するためにVOCAを用いたりすることが望ましい。」

大塚養護学校は以上のような提案や意見を参考にしながら，大塚養護学校の教育課程に基づいた，個別的教育支援計画，個別教育計画書，指導の見通し図を作成した。

週に1度，桐が丘養護学校支援部の教員が大塚養護学校に出向き，担当教員，介助員と共に直接支援・指導を行った。

自立活動に関わる評価は，支援者である桐が丘養護学校支援部の教員が学期末および学年末に報告書を提出し，担当教員がそれを参考にして成績表，要録を作成した。

### 2) 支援の具体例

#### ① 健康の保持・身体の動きの指導に関する支援

脳性まひなどの中枢性障害のある児童生徒は，不当な筋緊張や異常な反射の抑制，正常な反応の促進，抗重力筋や基本的な運動技能の育成などを，自立活動の中で「健康の保持」「身体の動き」に関する課題を多く有している。

今回の事例では，これらの課題に対する指導方法として，元桐が丘養護学校教諭，松本和子がボバースアプローチを基礎として独自に開発した「動きづくりのリハビリテーションマニュアル」（1996）を主として用いた。「長

表1 自立活動の視点による対象児童の課題と支援方法と手立ての提案

領域	課題	支援方法・手立て
健康の保持	長時間同じ姿勢にならないように注意し、一日の中で様々な姿勢がとれるように配慮したり、ストレッチ、リラクゼーションなどを行うことで、関節可動域の保持・改善を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マットの上で臥位になり、リラックスしたりストレッチなどの活動をする。</li> <li>・ 作業的な学習やスイッチ遊びをする時は前傾姿勢の座位保持椅子に座って行う。</li> <li>・ ペーサー・ゲートトレーナーを使用して立位姿勢をとる。</li> </ul>
	排泄の自立。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定時排泄により、排尿リズムの形成を図る。</li> <li>・ 手続きに従い、トイレでの排尿経験を増やす。</li> </ul>
心理的な安定	楽しむことのできる活動が増える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在楽しめている活動をくりかえし行いながら新しい活動を経験する。</li> <li>・ 見る、聞く、触るなど五感を使う活動を提供する。</li> </ul>
	遊びを通して教師とのやりとりを楽しむことができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びへ導入する時、変更する時は声をかけるなど興味や意欲を高めるように配慮する。</li> </ul>
環境の把握	視線の高さや角度を変えて周囲の状況に気づかせるようにする。視機能のアセスメントおよび見えやすい環境、教材を工夫することで、視る力を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前傾姿勢の座位保持椅子に座ったり、ペーサー・ゲートトレーナーを使用して立位姿勢をとったりすることで視線の高さや見える範囲を変化させるようにする。</li> <li>・ 背景や教材の色、コントラスト、大きさ、などを工夫し、見えやすい環境を設定することで視る力を育てる。</li> </ul>
身体の動き	関節可動域の保持・改善、ねがえり、四つ這いなどの基本的運動技能を養う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マットの上でストレッチ、寝返りや四つ這いなどの基本的な運動を行う。</li> </ul>
	座位保持、立位保持の補助機器をうまく活用しながら姿勢保持の技能を養う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前傾姿勢の座位保持椅子を用いて座位保持の力を養う。</li> <li>・ ペーサー・ゲートトレーナーを使用して立位保持の力を養う。</li> </ul>
	介助に対して協力することができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オムツを替える時に腰を浮かしたり着替えの時に手を挙げたりするように声をかけて自発的な動きを促すように働きかける。</li> </ul>
	前傾姿勢の歩行器を活用して移動することができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ペーサー・ゲートトレーナーを使用して自分の足を動かして移動することが楽しめるように配慮する。</li> </ul>
	机上でスイッチ遊びや作業的な活動を楽しみながら上肢操作の力を養う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前傾姿勢の座位保持椅子（ファンファンチェア、テーブル）を用いてスイッチ遊び、描画、造形遊びなどを行う。</li> </ul>
コミュニケーション	名前を呼ばれて声や手の動きで応えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝の会などで呼名の際に子どもの口を指差したり、手を挙げるようにしたりして返答を促すと共に、動きをよく観察する。</li> <li>・ 当初は応え方を固定せず相手の反応をよく見て柔軟に対応する。</li> </ul>
	言葉の受容、表出の力を養い、場面に応じた適切な応答ができるような力を養う。排泄の有無、要求、活動の選択などに対する応答の確実性を向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言葉ははっきりと簡潔に、単語を繰り返すようにして理解を促すように配慮する。</li> <li>・ 子どもの発した言葉をよく聴き、適切な表出があった時は繰り返してフィードバックできるようにする。</li> </ul>
	適切な代替コミュニケーションの手段を選択し活用することができるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 写真カード、シンボルカード、VOCAなど活動場面に応じて種々のコミュニケーション手段を使用しながら適切な方法を見つける。</li> <li>・ コミュニケーション手段は一つに固定することなく、場面に応じて使い分ける。</li> </ul>



時間同じ姿勢になることを防ぐ」「関節可動域の保持・改善」「寝返り、四つ這いなどの基本的運動技能を養う」等の課題は、個別の学習の時間に車椅子からマットの上に降りて、臥位になり、シェイキングや金魚運動を用いたりラクゼーションの促進、足関節、膝関節、股関節などの関節可動域を保持・増進するためのストレッチ、殿筋や大腿四頭筋などの抗重力筋の強化、ローテーション、四つ這い姿勢、あぐら座位、座位からの立ち上がりなどの学習を一連のプログラムにして、担当教員と一緒に実践するようにして手技を伝達するようにした（写真1）。これらのプログラムは、いわゆる機能訓練として実施するのではなく、発達段階や本人や家族の生活との関連などを考慮すること、対象児童にとって楽しく意欲的に行うことのできる運動遊びになることなど、教育的な観点から指導を展開するように留意して欲しいことを伝えるようにした。



写真1 身体の動きに関する指導の様子

## ② コミュニケーションに関する支援

重度の運動障害のある子どもは、能動的な活動をする経験がきわめて少なく、このことがコミュニケーション意欲を低下させる原因の一つになっていると言われている。スイッチやセンサーへの入力練習はコミュニケーション意欲を向上させることにつながる重要な要素であり、最近ではコミュニケーション学習のためのエイドとしてシンプルテクノロジーが広く活用されている。そこで、VOCAやスイッチを用いた遊びを学習の中でたくさん活用することによって、対象児童が楽しみながらコミュニケーションの力を育てることができるような支援方法を提案した。

### A. VOCAを使用したコミュニケーション支援

VOCA（Voice Output Communication Aids）は音声

出力によるコミュニケーション補助機器を総称したものであり、コミュニケーションを学習するための導入として有効な道具である。音声出力の方式は、機械的に音声を合成するタイプと子ども達の周りにいる人がメッセージを録音するタイプがある。本実践で使用した音声録音方式のVOCAはスイッチを押すという簡単な操作によってデジタル録音された自然な音声再生されるため、重度の障害のある子どもには適したコミュニケーションエイドになる。

あつまりの時間の呼名で用いる際に録音されたメッセージは「はい、～（対象児の名前）です」であった。使用開始時は、VOCAを対象児童の目の前に提示し、教員が手を誘導することで、スイッチを押すようにしたが、数回の試行で、自発的にスイッチに手を伸ばして押すことができるようになった。

### B. 遊びの場面におけるコミュニケーション支援

ジェリービーンスイッチ（Ablenet社）とBDアダプター、乾電池を使用した玩具を教材として用いた遊びを行うことにより、対象児童が活動を自らの力でコントロールできることに気づき、活動に対する意欲が高まるように支援した。また、それぞれの活動内容を写真カードとマッチングさせ、希望する活動が選択できることをねらいとした。遊びに使用した玩具はジェリービーンスイッチで動くシャボン玉マシンとパイプレーター機能の付いた魚釣りであった。

当初はシャボン玉マシン、魚釣りのいずれも興味を持って遊んでいたが、魚釣りの振動が楽しくなった様子で、実物を提示した選択、写真カードによる選択のいずれにおいても魚釣りの遊びを選択するようになった（写真2）。



写真2 魚釣り遊び

### ③運動の時間に使用する福祉機器の導入

知的障害養護学校における、体育や運動の授業では、長距離走や時間走などの活動が多く行われている。大塚養護学校の場合も、小学部低学年の運動の時間では、音楽が流れている間持続して走る、いわゆる時間走の活動が設定されている。当初、対象児童がその活動に参加する場合は、介助者がバギーを押す、あるいはバギーに乗った対象児童の手を引くという方法をとっていた。しかし、対象児童が少しでも自分の足を動かして移動することで、運動に参加して欲しいという保護者、教員、介助員の願いに対して、前傾姿勢の歩行器（Rifton社製 ペーサー・ゲートトレーナー）の導入を提案した。歩行器の導入に際しては、福祉機器メーカーからお借りした歩行器で1週間デモンストレーションを行い、有効性を確かめた上で、保護者と担当教員の下承のもとに導入を決定した（写真3）。



写真3 前傾姿勢の歩行器を利用した歩行

### ④排泄の指導に関する支援

重度の障害がある子どもにとって、排泄の介助と自立に向けての指導は重要な課題である。また、健康状態のチェック、QOLの向上、認知・コミュニケーションの機会が得られるなど多くの教育的意義を有している。

対象児童にとっても、おむつへの排泄からトイレでの排泄行動の形成を目指すことは、自立活動の指導目標・内容として設定される必要があると考えられたため、担当教員、介助員と話し合い、次のような手続きで排泄指導を実施した。

排泄後に泣くことはあるが、確実ではなく、事前に排泄の要求を判断することも難しいため、定時にトイレに行くことにした。トイレに行く時間は、これまでのおむつ替えの時間と授業時間を考慮し、午前は9時20分、午後は昼食後の13時とした。

トイレでの排泄行動の指導は、以下のような手続きをとった。

- 定時になったら、「おしっこある？」と聞いてトイレに行くことを告げる。
- トイレに誘導する。
- おむつのチェックをする。
- 既に出ている場合には、おむつを替える。
- 出していない場合には、トイレに座って5分待つ。
- 5分以内に排泄が成功した場合には褒めてあげる。
- 5分たっても出なかった場合には終了を告げる。

排泄行動は、おむつへの排泄、トイレでの排泄、排泄無しの3つのカテゴリーに分けて、時間と共に記録した。

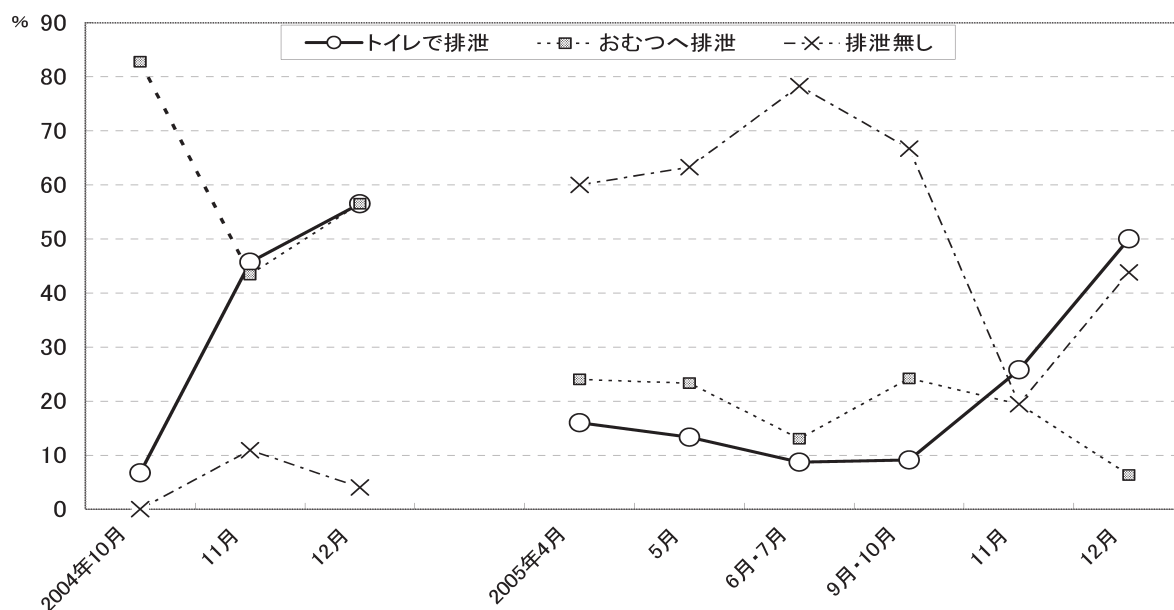


図1 排泄行動の記録

図1は記録を始めた2004年10月から2006年12月までの排泄行動を1ヶ月単位（出席数の少ない月は2ヶ月で集計）で、全ての排泄行動に対するカテゴリー別の排泄行動を百分率で示したものである。

排泄指導を2004年10月から実施して3週間目に初めてトイレでの排泄に成功した。その後12月まで、成功率が高くなっていったが、2005年1月から3ヶ月間、保護者出産のために肢体不自由児施設に一時入所したため排泄指導を実施できなかった。2006年4月（2年生時）から再び、同じ手続きで排泄指導を再開した。4月から夏休みを挟んで10月までは、体調不良などで休むことが多く、また、夏季は学校にいる間、まったく排尿がない日も多く、トイレでの排泄の成功率が低いままであった。その後、11月から12月にかけて再び成功率が高くなった。

重度の障害のある子どもにとって排泄の完全自立は難しい課題であるが、本実践から適切な指導と支援があれば、定時にトイレでの排泄行動が形成される可能性が示された。今後、対象児童の将来の家庭、社会生活も視野に入れて、排泄の自立に向けた指導を継続していく必要がある。

#### ④サポートブック作成への助言

複数の担当教員や介助員間の指導方法、支援の手続きに差異が生じたり、対象児童の反応に対する解釈が異なることを防ぐために大塚養護学校の支援部が中心となって以下のような内容のサポートブックを作成した。その際、必要とされる項目の選択、具体的な支援方法などに関して助言を行った。

##### 【サポートブックの手帳の目的】

この手帳は、対象児童のことをよりよく理解し、一貫した方法で支援ができることをめざして、関係者が協働して作成した。初めて対象児童に接する人でも、この手帳を見れば対応の仕方が理解できるようにした。この手帳を一つのツール（道具）として、将来にわたって関係者が連携しながら充実した支援が継続されることを願っている。なお、対象児童の成長と変容に伴って、内容を充実すると共に随時更新していく。

##### 【サポートブックの内容】

- ・ 保護者の願い
- ・ 健康面の情報（服薬、発作、アレルギー、かかりつけの病院）
- ・ ADLについて（トイレ、食事、移動）
- ・ コミュニケーションについて（「YES」「NO」の表出、

選択場面、泣くときの意味）

- ・ 好きな物や活動
- ・ 苦手なもの
- ・ 注意してほしいこと
- ・ 学校における一日の流れ
- ・ 関係者の連携先

#### 3) 支援に対する評価

これまでの支援に対する評価として、担当教員に対し、有効であった支援および今後継続を希望する支援についてのアンケート調査を実施し、その結果を図2にまとめた。図内のポイントは、特に有効だったあるいは特に継続希望の支援を2ポイント、有効だったあるいは継続希望の支援を1ポイントとして配点し、集計したものである。その結果、最も有効であり、継続希望である支援は自立活動（身体の動き）の指導方法であり、次いで肢体不自由教育に関する教材教具や福祉機器に関する情報提供であった。介助方法の指導も有効であったとの評価を得られたが、担当教員が介助に慣れてきたこともあり継続のポイントはやや減少している。また、自立活動以外に、肢体不自由児の体育や造形などの指導内容や方法に関しても継続支援の必要性が認められた。

#### 4. 考 察

担当教員のアンケート調査からは、本事例の重複障害児童に対する肢体不自由養護学校からの教育支援が有効であったことが示された。しかし、本事例以外の肢体不自由を併せ持つ重複障害幼児児童生徒が知的障害養護学校である大塚養護学校において学習する際に、どのような教育支援のニーズがあるかは明らかになっていない。そこで、附属大塚養護学校に対して次のようなSWOT分析を試みた。大塚養護学校の全教員に対し、肢体不自由を併せ持つ知的障害幼児児童生徒が大塚養護学校で学習する場合に、強いあるいは有利な点（S）、弱いあるいは不利な点（W）、学校外の環境に関して、有利あるいはよい関係にあること（O）、学校外から環境で不利あるいは脅威と感ずること（T）についてのアンケート調査をし、SWOT分析としてまとめた。作成した分析図と肢体不自由養護学校である桐が丘養護学校が実施可能な教育支援の内容を整理したものを図3に示した。

大塚養護学校の強いところは「知的障害教育に関する専門性が高い」「集団によるダイナミックな活動が展開できる」「子どもにとってわかりやすい授業である」であり、弱いところは「運動障害に関するノウハウがない」「肢体不自由教育に関する教材教具や福祉機器の情報が



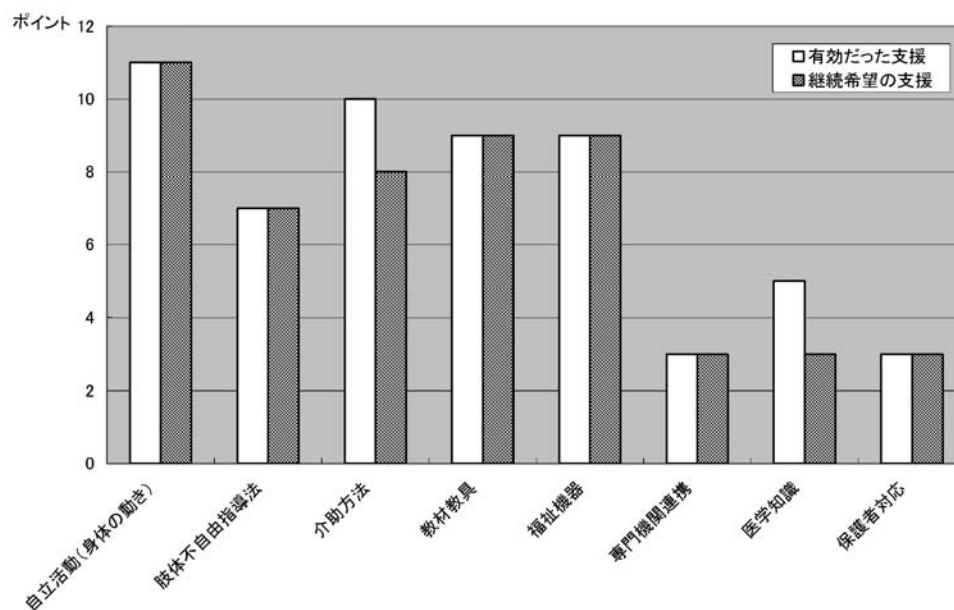


図2 支援に関する担当教員の評価

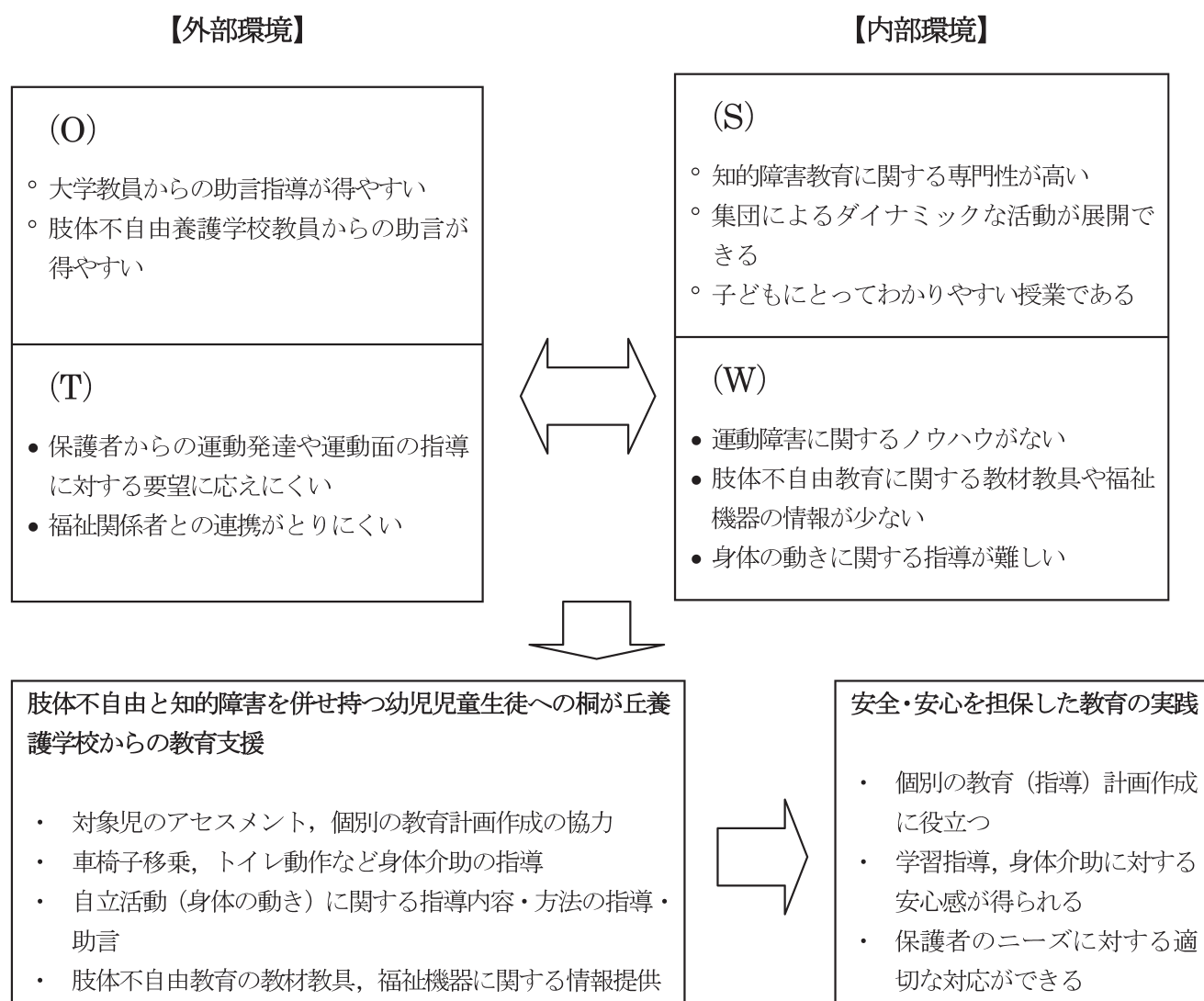
少ない」「身体の動きに関する指導が難しい」であった。また外部環境から得られる良い機会は「大学教員からの助言指導が得やすい」「肢体不自由養護学校教員からの助言が得やすい」ことであり、逆に脅威となるのは「保護者からの運動発達や運動面の指導に対する要望に応えにくい」「福祉関係者との連携がとりにくい」ことであった。

そこで、本事例のように外部の資源として最も身近である桐が丘養護学校から、「対象児のアセスメントおよび個別的教育計画作成の協力」「車椅子移乗、トイレ動作など身体介助の指導」「自立活動（身体の動き）に関する指導内容・方法の指導・助言」「肢体不自由教育の教材教具、福祉機器に関する情報提供」などの教育支援を行うことで、「個別的教育（指導）計画作成に役立つ」「学習、指導、身体介助に対する安心感が得られる」「保護者のニーズに対する適切な対応ができる」など教員にとっても保護者にとっても安全安心を担保した教育の実践が行えることが示唆された。

盲・聾・養護学校に在籍する児童生徒の重度・重複化が語られるようになって久しいが、その傾向は年々進んでいるようである。文部科学省の統計では、平成16年5月1日現在で、盲・聾・養護学校に在籍する幼児児童生徒のうち、半数近く（肢体不自由養護学校においては、約4分の3）が重複障害学級に在籍している。知的障害養護学校においては33.3%が重複障害学級在籍者であ

り、その中で肢体不自由を併せ持つ重複障害児は34.7%である。3つ以上の重複障害のある者も15%在籍していることを考え合わせると、知的障害養護学校在籍幼児児童生徒の中で12%～16%が知的障害と肢体不自由を併せ持っていることになる。また、病弱養護学校でも肢体不自由を併せ持つ児童生徒が5%～10%在籍している。平成19年4月から盲・聾・養護学校が障害種別を超えた特別支援学校に一本化され、複数の障害種別を教育の対象とすることができるようになるに制度の弾力化が図られるようになると、これまで以上に多様な障害のある幼児児童生徒が在籍する傾向は高くなることが予想される。

今後、本研究で実践したような、知的障害と肢体不自由の養護学校間の連携だけではなく、盲・聾・養護学校がこれまで培ってきた、様々な専門性をお互いに提供し合い、共有し、発展させていく特別支援学校間の連携が在籍幼児児童生徒の重度化、重複化、多様化の課題に対応するための解決策の一つになると考えられる。



**図 3 肢体不自由を併せ持つ幼児児童生徒が大塚養護学校で学習する際の S W O T 分析と桐が丘養護学校からの教育支援**

## 謝 辞

本研究は対象児童の協力なしにはできませんでした。また、ご家族の皆様には本研究をまとめることを快諾いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 文 献

- 学校組織マネジメント研修テキスト（2004）学校を取り巻く環境分析と対策の検討，46-65
- 保坂俊行（2005）肢体不自由を伴うー重度・重複障害児のトイレでの排尿行動の形成，特殊教育学研究，第43巻4号，309-320
- 古川勝也（1999）自立活動の改訂の要点について，肢体不自由教育141，4-12
- 松原 豊（1999）重度・重複障害児を対象としたM.O.V.E.プログラムの事例研究3，筑波大学附属桐が丘養護学校研

究紀要，第35巻，80-85

- 松原 豊（2002）重度重複障害児を対象としたAACの事例研究1～複数のコミュニケーションエイドを用いた事例について～，筑波大学附属桐が丘養護学校研究紀要，第38巻，170-178
- 松本和子（1996）動きづくりのリハビリテーション・マニュアル，中央法規出版
- 文部科学省（2004）特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）[参考資料] -2